―調査報告―

快慶作品の造像銘記に関する二、三の知見

山口隆介

はじめに

平成二十九年（二〇一七）春、奈良国立博物館で特別展「快慶　日本人を魅了した仏のかたち」が開催された。同展では、いま国内外で確認されている快慶作品の約八割を一堂に展示することが実現し、仏師快慶がわが国の仏教美術史上に残した偉大な足跡をたどる好機となった。

周知のとおり、快慶には銘記等によって彼の作と確認できる遺品がきわだって多く、鎌倉時代初期における造像界の動向を具体的に知るうえで不可欠な存在である。快慶作品の銘記は先学により実査等で見出されるたびに報告されてきたが、そうした成果をふまえて刊行された『日本彫刻史基礎資料集成』により、現在では比較的手軽に銘記を通覧することが可能になった。(1)

本稿では、特別展に出陳された快慶作品においてあらたに確認した銘記の報告を行うとともに、既知の銘記のうち加筆や訂正を要すると判断されたものについても述べることで、今後の研究の一助としたい。(2)

京都・松尾寺阿弥陀如来像

松尾寺像〔図1〕は、像内後頭部の正中線の矧目左側にある「[illegible]阿弥陀仏」の墨書から、無位時代の快慶作品と考えられ、その作風から比較的初期の作と推定されている。(3) 墨書は後頭部中央から襟首

図1　阿弥陀如来坐像　京都・松尾寺

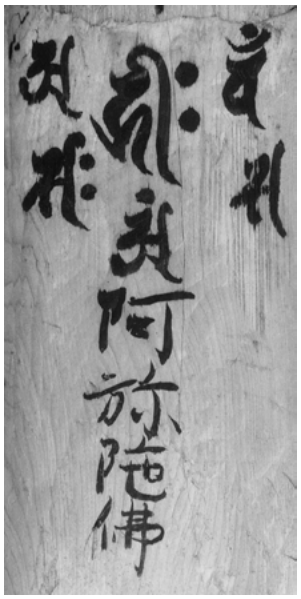
図7

図6

図5

図4

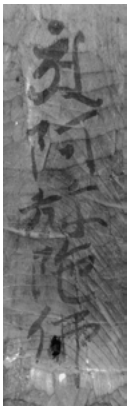
図3

図2

図2　阿弥陀如来坐像　像内後頭部墨書（近赤外線画像）　京都・松尾寺
図3　地蔵菩薩坐像　像内頸部前面墨書　京都・如意寺
図4　同　像内両脚部墨書
図5　執金剛神立像　左足枘内側墨書　京都・金剛院
図6　深沙大将立像　左足枘内側墨書　京都・金剛院
図7　阿弥陀如来立像　像内胸部墨書　大阪・八葉蓮華寺

にかけてしるされており、首部の刳孔がやや小さいために下方が確認しにくいが、このたび全文を撮影した〔図2〕。この墨書を他の快慶作品の𑖀阿弥陀仏銘と比較すると、像の大きさに比して銘記が大ぶりで、かつ太字である点に特色が見出せる。さらに注目されるのは、松尾寺像ほど太字ではないものの同筆とみられる𑖀阿弥陀仏銘及び巧匠𑖀阿弥陀仏銘が複数知られることで、京都・如意寺地蔵菩薩像の像内頸部前面及び像内両脚部墨書〔図3・4〕、京都・金剛院執金剛神像左足枘内側墨書〔図5〕、同深沙大将像像内胴部矧面及び左足枘内側墨書[4]〔図6〕、大阪・八葉蓮華寺阿弥陀如来像の像内胸部墨書〔図7〕があり、八葉蓮華寺像の像内納入品のうち「𑖀阿弥陀仏御房宛僧賢印書状」の紙背の「𑖀弥陀仏」も同筆とみてよい。如意寺・金剛院・八葉蓮華寺の各像の墨書について根立研介氏は、同筆でありかつ快慶自筆の可能性を指摘している[5]。松尾寺像の𑖀阿弥陀仏銘も同様に考えてよいだろう。そうとすれば、無位時代の快慶が丹後地方にまとまって残した作品、すなわち松尾寺像・如意寺像・金剛院像のいずれもが自筆の銘記をもつことになり興味ぶかい。

このほか𑖀阿弥陀仏銘とは別に、像内左側頭部に「□慶」の墨書も確認された〔図8〕。一文字目は判読がややむずかしいものの、右肩にある鉤形の線の色が墨とはすこし異なることも考慮

図8　阿弥陀如来坐像　像内左側頭部墨書（近赤外線画像）　京都・松尾寺

して筆画でないと判断すれば、「尊」の草書体である可能性が考えられるだろう。また、複数名を列記する結縁交名でなく、𑖀阿弥陀仏以外の人名を単独で頭部内にしるす例は、いま知られる快慶作品の銘記には見当たらない。ただし、快慶周辺にまで視野を広げると、類する銘記をもつ作品として奈良・来迎寺善導大師像〔図9〕がある。来迎寺像は快慶作品に通ずる作風をしめし、像内背部にしるされた結縁交名のうち金阿弥陀仏ら六名が、建仁三年（一二〇三）の京都・醍醐寺不動明王像と共通することが指摘される。(6) 来迎寺像の像内頭部〔図10〕には尊慶の名が複数見出されており、(7) 複数である点に松尾寺像との相違があるものの、同一人である可能性もふくめて注目される。

図9　善導大師坐像　奈良・来迎寺

図10　同　像内頭部墨書

奈良・安養寺阿弥陀如来像

安養寺像〔図11〕は、快慶が生涯に数多く手がけた像高三尺（約九〇センチメートル）前後の来迎印を結ぶ阿弥陀如来立像、いわゆる「三尺阿弥陀」の無位時代の優品として知られている。いま左足枘外側にある「巧匠安阿弥陀仏」の墨書〔図12〕は、薄く削り直した上にしるされており近世の筆とみられるが、一部に旧字を重ね書きした箇所があることから、当初の銘記にもとづいて書き直したも

図11　阿弥陀如来立像　奈良・安養寺

図12　同　左足枘外側墨書

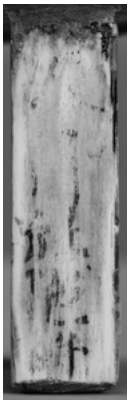

図13　同　左足枘正面墨書（近赤外線画像）

図14　同　右足枘正面墨書（近赤外線画像）

のとされる。[8]

一方で左右足枘正面の墨書〔図13・14〕は、右方分が「生阿弥陀仏」と読めるものの、左方分は一文字目が判読できず「□阿弥陀仏」とされていた。このたびあらためて近赤外線撮影を実施したところ、左方分は墨がかすれて依然読みにくいものの「人」と判読しうるように思われた。「大」の可能性がないとはいいきれないが、現状では「大」の一画目にあたる横棒は確認できないため、「人」である可能性を考えておきたい。

阿弥陀仏号をもつ人名は、無位時代の快慶作品の像内銘記にしばしばみられるものの、足枘にしるされる例はめずらしい。巧匠安阿弥陀仏銘とともに明示されることからすれば、生阿弥陀仏と人阿弥陀仏はともに安養寺像の主要な結縁者なのだろう。生阿弥陀仏は、建久五年（一一九四）ごろ快慶作の京都・遣迎院阿弥陀如来像に納入されていた結縁交名や、建仁三年（一二〇三）運慶・快慶ら作の奈良・東大寺南大門金剛力士像のうち吽形の頭部内などにみられ、人阿弥陀仏も遣迎院像の結縁交名中にその名がみえる。もとより同一人である確証はないが、同時期の快慶作品中に同一の阿弥陀仏号が見出せることは、いちおう注意されてよいだろう。

京都・醍醐寺不動明王像

醍醐寺像〔図15〕は像内の各所にしるされた銘記のうち、胸部〔図16〕に「建仁三年五月三日」の年紀と「巧匠[illegible]弥陀仏」の名があることから、建仁三年の快慶作とわかる。醍醐寺像の銘記は、これまでにも折に触れて取り上げられてきたが、[9]このたび左記のゴシック体でしめした箇所を確認した。

図15　不動明王坐像　京都・醍醐寺

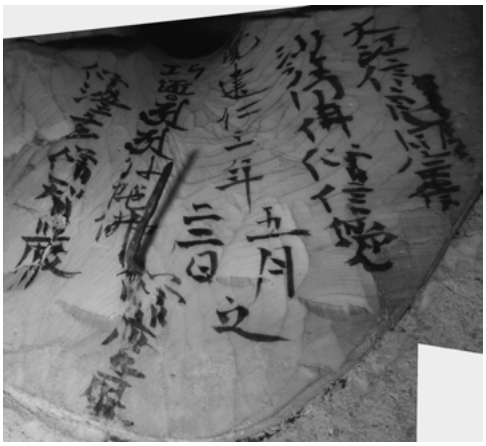

図16　同　像内胸部墨書（近赤外線画像）

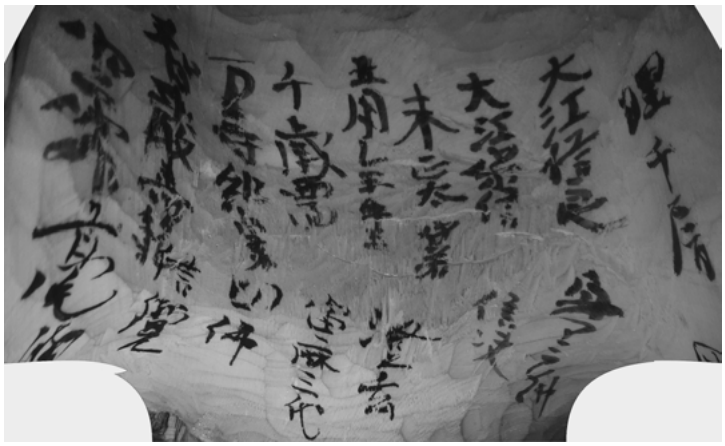

図17　同　像内腹部墨書（近赤外線画像）

［像内胸部　墨書］

大江信良　同宗信
沙弥円仏　僧信覚
建仁三年五月三日之
巧匠𑖨𑖨弥陀仏　僧空寂
僧澄玄　僧智厳

［像内腹部　墨書］

真高　楽阿弥陀仏
理チ房　国真
大江信良　身アミタ仏
大江宗信　信快
末正太　□弟
土用乙王牛王　澄玄
千歳西面　当麻三氏
万寿紀□弟　円仏
智厳寿範　信覚
空寂　毫覚

胸部の墨書の下方部分は、首部の割矧目にほどこされた木屎漆に隠されているため未解読だったが、近赤外線撮影により二文字が見出された。胸部の墨書には複数の僧名がしるされ、問題の二文字も僧を冠していることから人名とみてよいが、やや読みにくいところがある。これを解読するうえで参考となるのは、胸部の結縁者名のうち巧匠𑖨𑖨弥陀仏すなわち快慶以外の人名が、腹部の墨書〔図17〕にも重複してしるされることである。そうとすれば、いま問題としている僧名も腹部にその名がしるされている可能性があり、字形の類似する人名を探してみると「空寂」が目にとまる。ふたつの空寂は、筆致にいくぶん相違もあるが、ここでは候補として空寂を考えておきたい。

像内腹部の墨書は、先学によりほぼ解読されているが、五行目末尾と八行目「万寿紀」以下の二文字が未解読で、五行目末尾については「□栄」と読む案が出されているものの[10]、なお大方の支持を得るには至っていない。本稿では、五・八行目ともに二文字目を同字とみなしたうえで、「□弟」と判読したい。

頭頂部から右胸部にかけてしるされた墨書〔図18〕は、玉眼の押さえ木と周囲の木屎漆によって上部中央が隠された状態となっており、判読できない部分がある。五行目から九行目の墨書について『日本彫刻史基礎資料集成』は、最新の解読として「一切衆（シウ）□／リレ寸シ／□□シヤ／らし　□陀仏／金阿弥陀仏」を掲載している[11]。さらに同書は、七行目について「ウ□シヤ」と読む案や、「ワ□シヤ」と読む案があることを注記したうえで「□□シヤ」としているが[12]、いずれも文意は明らかでない。先に触れたとおり、この部分の墨書は下方につづく文字が隠されている可能性があるため、今回

の調査でも全容を解明することはできなかったが、従来とは異なる読みを試みた箇所（**ゴシック体**でしめした）について以下に述べる。

［頭頂部から右胸部にいたる墨書］

御眼巧匠円阿弥陀仏　一心求菩提沙門仏子毫覚
信快　明□　□　覚円
□行者
□う
一切衆□
リレ寸シ
ワウシヤ
ら□
金阿弥陀仏　□陀仏

図18　同　像内頭頂部から右胸部にいたる墨書（部分）

まず「リレ寸シ」と解読されている六行目について、「寸」は「ス」と読めるが、「キ」と読むこともあるようであり、また「等」の略体字も「寸」と字形が類似するため、「キ」あるいは「ラ」と読む可能性も考えられる。[13]「ウ□シヤ」や「ワ□シヤ」などの案が出されていた七行目について、一文字目は「和」の略体字とみて「ワ」と読んでよいように思うが、ほかに「呂」の略体字も字形が類似するため、片仮名の「ロ」の可能性もいちおう残される。片仮名の「ウ」のような形の文字とその下の点からなる二文字目は、「宇」の略体字とみてよく、したがって「ウ」と読むことができると思われる。八行目は「らし」と読まれているが、二文字目は字形が明瞭にうかがえず、あるいは「らん」かとも推測される。

図19　同　像内右腋腹部墨書（近赤外線画像）

像内右脇腹部の「□アミタ仏」と読まれていた墨書については、近赤外線撮影により次のような画像が得られた〔図19〕。「土アミタ仏」と読むことができるだろうか。上阿弥陀仏であれば同時代の結縁交名等に時折みられるものの、土阿弥陀仏は管見のかぎり類例がないため、ここでは可能性を指摘するにとどめたい。

なお先述のとおり、像内胸部の結縁者名のうち快慶以外は、像内腹部にも重複して名をしるす点に特色があるが、くわえて頭頂部から右胸部にかけての結縁者名のなかにも、腹部ないし背部に重複して名がしるされる人物がいる（毫覚、信快、金阿弥陀仏）。結縁者名がこれほど重複する銘記は、いま知られる快慶作品のなかでも醍醐寺像にかぎられ、書風が一様でない点からは複数回にわたって結縁が行われたのかとも想像される。いずれにせよ、いまにわかにその意味を明らかにできないが、像への結縁がどのようにして行われていたかを考えるにあたり興味をひく事例である。

滋賀・石山寺大日如来像

石山寺像〔図20〕は、像内頭部前面から左方にかけてしるされた墨書〔図21〕中に「𑖀阿弥陀仏」の銘記があることから、建仁三年（一二〇三）十一月三十日の快慶法橋叙任以前の作とわかる。この像が本尊として安置される多宝塔は、昭和七年（一九三二）から翌年にかけて行われた解体修理に際して、須弥壇上框裏に「建□甲寅十二月廿日供養」の墨書が発見された。これにより、建久五年甲寅（一一九四）の供養と推定され、像も多宝塔創建時の本尊として造立されたと考えられる。[14]

石山寺像についても、頭部内墨書の近赤外線撮影を実施した。その結果、従来「尼覚□□（如カ）（房カ）」とされていた箇所は、「尼覚如房」と読んでさしつかえないと判断された。また向かって左端の「土用□□□」と読まれていた箇所のうち、三文字目と四文字目は「太白」（宵の明星＝長庚）の可能性があるように思われるため、「土用□□□（太白カ）」としておきたい。

さらには、左目の玉眼押さえ木の下方にこれまで未報告の墨書〔図22〕が見出された（ゴシック体でしめした）。

図20　大日如来坐像　滋賀・石山寺

図21　同　像内頭部前面から左方墨書（近赤外線画像）

［像内頭部前面から左方　墨書］

○（右耳孔）
南无阿弥陀仏　五郎丸

尼覚如房　毘沙□丸

玉眼押さえ木　玉眼押さえ木

□□□□□
イシヤウ
ノトヨ
金アミタ仏

万アミタ仏

円アミタ仏

𑖀阿弥陀○（左耳孔）

了アミタ仏

金アミタ仏　忍アミタ仏

土用□□□（太白カ）

図22　同　左目の玉眼押さえ木下方墨書（近赤外線画像）

墨書は小字で複数行が確認できるが、いずれも上方は玉眼押さえ木を固定するための木屎漆に隠されており、文字自体も判読の難しいものが多い。かろうじて判読可能な文字をふくむのが向かって左側の三行で、左端の一行は「金アミタ仏」と読むことができる。その右側には、二行にわたって片仮名で「□イシヤウ／ノトヨ」と読める墨書がある。文意は明らかでないが、結縁者名を列記したものではないようにみえる。

石山寺像で興味ぶかいのは、頭部内に大小二種の金アミタ仏銘をしるすことである。大きいほうは「𑖀阿弥陀」すなわち快慶や、ほかの阿弥陀仏号をもつ人名と同程度の文字の大きさでしるされる点から、この像への結縁をしめすものとみられるが、小さいほうはどのように考えられるだろうか。現状で小字の墨書の全容が把握できないため詳細は不明とせざるを得ないが、片仮名の墨書の末尾に金阿弥陀仏の名を同筆でしるす点は、先にみた醍醐寺像と通ずるところがあることに注目したい。すなわち、醍醐寺像頭部内の平仮名・片仮名・漢字を混用した墨書の左側にやはり同筆で金阿弥陀仏の名をしるすことに思い至るのである。快慶作品のなかには、「御眼巧匠円阿弥陀仏」（醍醐寺不動明王像像内頭部墨書）や「髪万阿弥陀仏」・「開眼円□」（東京芸術大学大日如来像像内頸部墨書）など、快慶工房における分業制作を示唆する事例があるが、醍醐寺像及び石山寺像の像内頭部前面に金阿弥陀仏の名とともにしるされた仮名混じりの墨書についても、あるいは快慶工房の分業制作において金阿弥陀仏が担った役割と何らかの関連があるものかもしれない。

東京芸術大学大日如来像

芸大像〔図23〕は、像内右耳部の墨書〔図24〕中に「𑖀阿弥陀仏」の銘記があり、像内背部に「巧匠□」の朱漆書〔図25〕があることから、建仁三年（一二〇三）十一月三十日の快慶法橋叙任以前の作とわかる。明治三十二年（一八九九）に東京芸術大学の前身である東京美術学校が購入したことが知られるものの、それ以前の伝来は明

図23　大日如来坐像　東京芸術大学

らかでない。先に触れた石山寺大日如来像〔図20〕とは、法量の一致はもとより、形状や作風が酷似し、さらには銘記中の人名が多く共通することから、ほぼ同時期に制作されたとみられている。[15] 左記の銘記のうち、**ゴシック体**でしめした部分がこのたび確認された箇所である。

〔像内右耳部　墨書〕

金ア□□(仏カ)
円アミタ□
貞阿弥陀仏　尼覚如房
了アミタ仏
忍**アミタ**□

〔像内左耳部　朱漆書〕

定阿弥□
□□(快カ)

像内右耳部〔図24〕には、「円アミタ□」の向かって右側に「金ア□□(仏カ)」と読める一行が見出された。これは石山寺像、京都・悲田院阿弥陀如来像[16]、建仁二年（一二〇二）ごろの三重・新大仏寺如来像頭部、同三年の醍醐寺不動明王像及び奈良・安倍文殊院文殊菩薩像などの快慶作品に結縁者として名がみえ、重源（一一二一～一二〇六）が建立した周防別所の同行衆であったことも知られる[17]金阿弥陀

図26　同　像内頸部正面墨書（近赤外線画像）

図25　同　像内背部朱漆書

図24　同　像内右耳部墨書（近赤外線画像）

仏を指すとみてよい。また、「円アミタ□」の向かって左側の一行は、「尼覚□」とされていたが「尼覚如房」と読んでよいと思われ、そうとすれば石山寺像の銘記にみえる「尼覚如房」、醍醐寺像や安倍文殊院像の銘記にみえる「覚如房」と同一人の可能性が考えられる。向かって左端の「忍□」と読まれていた一行も「忍アミタ□」と判読することが可能であり、やはり石山寺像や悲田院像などの快慶作品に名のみえる忍阿弥陀仏とみてよい。

さらには、芸大像の像内頸部正面の墨書〔図26〕にみえる「髪万阿弥陀仏」をふくめれば、芸大像と石山寺像にしるされた阿弥陀仏号をもつ結縁者名は、ほとんどが共通することになる。両像を同時期の制作とみなす従来説を補強するものといえるだろう。

像内左耳部〔図27〕にある二行の朱漆銘は、向かって右から「定阿弥□」「寂□」と解読されている。[18] このうち「定阿弥□」は、遣迎院像、建仁元年（一二〇一）の東大寺僧形八幡神像、同寺南大門吽形像に結縁者として名のみえる定阿弥陀仏と同一人の可能性がある。一方の「寂□」は判読がむずかしく、本稿では「□□（快カ）」とした。一文字目はウ冠の文字かとみられ、「寂」とするのも一案だが、なお決め手を欠く。二文字目は不明瞭ながら旁は「夬」と読むことができ、偏は立心偏とみられることから、「快」の字を考えたい。そうとすれば人名として「寂快」はやや考えにくいように思われるため、ここでは一文字目も「寂」とは別字である可能性を指摘するにとどめたい。

図27　同　像内左耳部朱漆書（近赤外線画像）

三重・新大仏寺如来像頭部

新大仏寺像〔図28〕の頭部は、首枘部左側木口〔図30〕に「大和尚南無阿弥陀□」すなわち重源の名とともに「大仏師安阿□」としるされることから、安阿弥陀仏すなわち快慶の作とわかる。快慶が𡚁（安）阿弥陀仏と名乗った建仁三年（一二〇三）十一月三十日の法橋叙任以前の作だが、いま失われた寺蔵文書に建仁二年十月□

図28　如来坐像　三重・新大仏寺

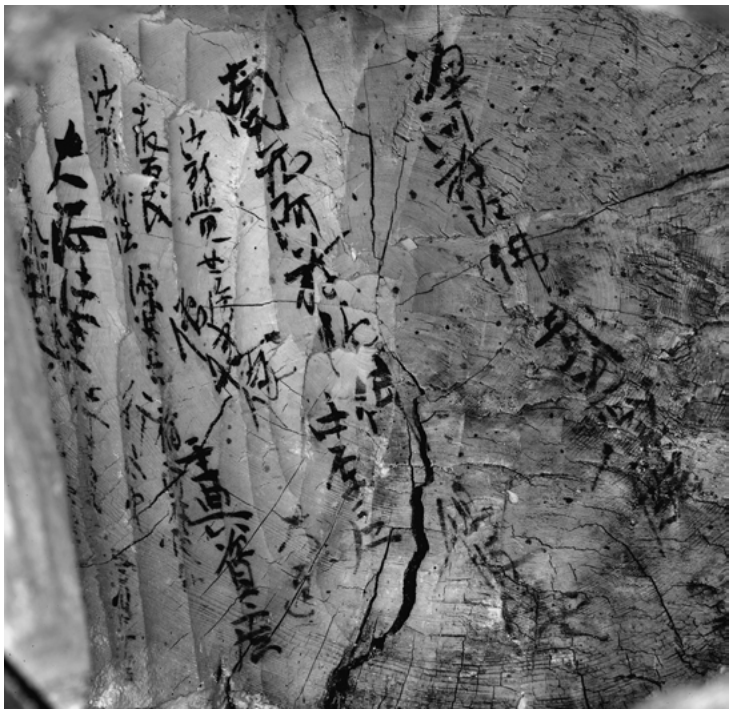

図29-1　同　頭部内墨書（近赤外線画像）

図29-2　同　頭部内墨書（近赤外線画像）

九日の年紀を有する交名があり、これが寺の建立と関係するとみなして建立年代を建仁二年に求める見解がある。[19] 左記の墨書のうち、**ゴシック体**でしめした箇所をあらたに確認した。

［頭部内　墨書］

（頂から右耳にかけて）

源阿弥陀仏　**武蔵殿**

南無阿弥陀仏　**但波殿**

中原**尼**

沙弥覚女房　僧快慶　**大遅**

藤原氏　主典資広

沙弥妙法　源安吉　福阿弥陀仏

行家

大証法主　□□□□（阿弥陀仏カ）□　□

□阿弥陀仏

□阿弥陀仏　□

□

□□弥陀仏　□

□阿弥陀仏　財阿弥陀仏

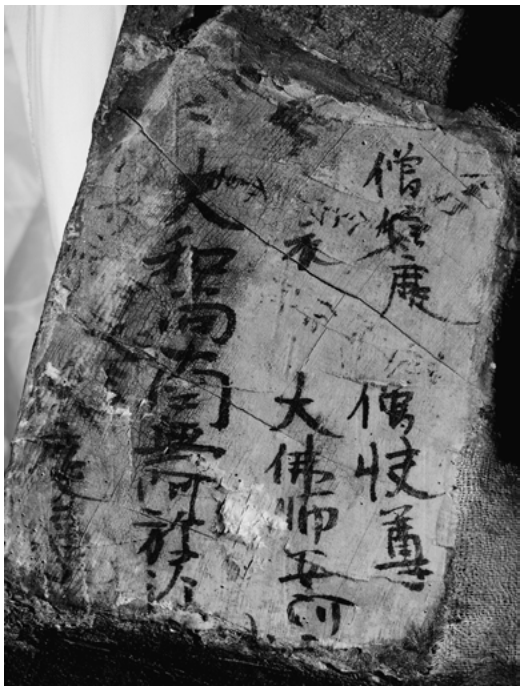

図30　同　首枘部左側木口墨書（近赤外線画像）

図31　同　首枘部右側木口墨書（近赤外線画像）

［首枘部　墨書］

（左側木口）

金阿弥陀仏（左行の信の上に重ね書き）

僧信慶　僧快尊

□　大仏師安阿□

□　□

□　大和尚南無阿弥陀□

□　法界衆生　僧慶蓮

（右側木口）

如阿

□万　得阿□仏　□

僧良快　寿阿弥陀仏

僧良円　登阿弥□仏　□（但カ）

宗頓　□

□

頭部内の頂から右耳にかけての部分〔図29〕は、近赤外線撮影により「源阿弥陀仏」の下方に「武蔵殿」、「南無阿弥陀仏」の下方に「但波殿」、「僧快俊」の下方に「大遅」と読める墨書がそれぞれ確認された。また「中原□」とされていた墨書は、「中原尼」と判読した。

武蔵殿は、同じく新大仏寺像頭部内の右耳下から顎にかけての墨書中にみえる「武蔵殿」と同一人だろう。また、遣迎院像に納入されていた結縁交名には、武蔵殿と丹波殿（但波殿）の名がつづけてしるされた一枚があり、新大仏寺像の銘記と同一人の確証はないものの、偶然の一致として片づけるのは惜しいようにも思われる。

「大遅」の二文字目は之繞の文字であり、「遅」の草書体かとみられる。前後の墨書が結縁者名であることから推せば、同様かとも思われるが、大遅を人名とみなしてよいかなお疑問が残る。

首枘部の左側木口の墨書〔図30〕は、快慶や重源の名にくわえ重源の同行衆として快慶作品に数多く結縁している金阿弥陀仏の名がしるされる点も注目される。墨のかすれや後世の表面補修により判読不能な部分もすくなくないが、「僧信慶」の左側に横向きにしるされた「念阿弥陀仏」の末尾には、「妻」の一文字があらたに確認された。また「僧快尊」と「大仏師安阿□」の上には、やはり横向きに六文字ほどの痕跡があり、阿弥陀仏号かとも思われるが、摩滅がいちじるしく判読できない。そのほか「大和尚南無阿弥陀□」の上方や左側にも墨痕が確認されるが、詳細不明である。

首枘部の右側木口〔図31〕にも「得阿□仏」の上方に「□万」、「登阿弥□仏」の下方には「□（但カ）」の文字や、横向きに「一蓮□」などの墨書が部分的に確認されたものの、いずれも文意は明らかでない。

光林寺阿弥陀如来像

光林寺像〔図32〕は、左足枘外側にしるされた墨書〔図33〕により、快慶が法眼位にあった承久三年（一二二一）の作とわかる。[20] 数ある快慶法眼時代の作品のなかでも制作年の明らかな像として貴重であり、また一行目に作者や制作年以外の情報をふくむ可能性がある点も興味をひくが、一・二行目の文字には上から墨が塗られているため、解読が困難な点が惜しまれる。

図32　阿弥陀如来立像　奈良・光林寺

図33　同　左足枘外側墨書（近赤外線画像）

［左足枘外側　墨書］

□
□法眼
快慶　承久三年

この墨書についても近赤外線撮影を実施し、以前より若干読みやすい画像が得られたものの、さらに解読

を進めることはできなかった。ただし、従来「造立」と判読されていた二行目の上二文字は、「造立」と読むのはむずかしく、またこの部分のみ書風が異なる点からも、後世に何らかの事情で一・二行目を墨で塗りつぶした際に補筆したかとも想像される。さらに快慶法眼時代の立像作品の足枘銘は、一部の年紀をともなうものをふくめ例外なく「巧匠法眼快慶」としるしていることを勘案すれば、やはり二行目の上二文字はもともと「巧匠」と書かれていた可能性を考慮すべきだろう。

また、これまで未解読の一行目は四文字とみられ、墨塗りの下層にところどころ当初と思われる筆画を確認しうる。一文字目は旁に「斤」のある文字だろう。二・三文字目は、おそらく同じ偏をもつ文字で、残画から偏は「酉」かとも推測されるが、現状でこれ以上の追究は困難なため、ここでは画像を掲示し識者の教示を仰ぎたい。

むすびにかえて

本稿では、快慶展であらたに確認された銘記の報告を行うことに努めた。最後に快慶作品の造像銘記を通覧するなかで関心をもった阿弥陀仏銘や巧匠阿弥陀仏銘の記載法の問題について若干の考察を行い、むすびにかえたい。

無位時代の快慶作品には、ひとつの像に阿弥陀仏と巧匠阿弥陀仏の二種の墨書を併記する例がある。如意寺像、金剛院深沙大将像、八葉蓮華寺像などがそれで、如意寺像は像内頸部前面に「阿弥陀仏」、像内両脚部に「巧匠阿弥陀仏」、金剛院深沙大将像は胴部矧面に「阿弥陀仏」、左足枘に「巧匠阿弥陀」、八葉蓮華寺像は像内胸部に「阿弥陀仏」、左足枘に「巧匠阿弥陀仏」の墨書がある。[21] そして、巧匠を冠しない阿弥陀仏銘は、像内の頭部や胸部など閉ざされた空間にしるすことが多く、一方で巧匠を冠する阿弥陀仏銘は、立像の足枘や坐像の像内両脚部にしるすという一定の法則があることもわかる。

阿弥陀仏銘は、像の完成後には記入がむずかしい部分に書かれていることからすれば、造像途上のある段階で結縁者の立場からしるしたものなのだろう。これに対して巧匠阿弥陀仏銘は、立像の場合には台座から足枘を抜き、坐像の場合には横に寝かせれば、はっきりと確認できる位置にしるされており、像の完成時に制作者であることを明示する目的で書かれたものと考えられる。[22]

ただし、この法則には一部の例外がある。安倍文殊院文殊菩薩像〔図34〕と醍醐寺不動明王像〔図15〕がそれで、安倍文殊院像は「建仁三年十月八日」の年紀や、「南無阿弥陀仏」すなわち重源をはじめとする多数の結縁者名とともに「弥陀仏」と「巧匠安阿弥陀仏」の墨書が同じ頭部内にしるされている〔図35〕。年紀につづく二

図34　文殊菩薩騎獅像　奈良・安倍文殊院

図35　同　像内頭部墨書

文字は、「書之」と読まれており、銘文はこの時点でしるされ、像は木作をおおむね終えて組み上げる前の段階にあったと推定されている[23]。巧匠𑖀阿弥陀仏銘は、通常、像の完成段階で制作者の立場からしるしたと想像されるが、安倍文殊院像の場合は制作途上の節目（組み上げ前か）に年紀をともなう造像銘を頭部内にしるすことになったため、制作者であることをしめす巧匠安阿弥陀仏の銘記と、像への結縁をしめす𑖀弥陀仏の銘記がほぼ同時に同じ頭部内に書かれたものと推察される。

醍醐寺像は、先に触れたとおり像内胸部に「建仁三年五月三日」の年紀と「巧匠𑖀𑖀弥陀仏」の名がある〔図16〕。この墨書は、書かれた位置からも像の完成時の銘記ではなく、制作途上のある時点のものとみられる。年紀につづく文字は「之」とのみしるされているため、建仁三年五月四日が造像開始の日付なのか、木作を終えて組み上げる前の段階なのか、あるいは別の段階なのかは判然としない。いずれにせよ、制作途上の段階で巧匠を冠する阿弥陀仏銘をしるすのは一連の法則から外れるが、この銘記は年紀をともなう点からも造像銘とみてよく、「巧匠𑖀𑖀弥陀仏」は制作者であることを明示したものと解される。

このように、安倍文殊院文殊菩薩像と醍醐寺不動明王像は、同じ建仁三年の作であるのみならず巧匠𑖀阿弥陀仏銘の例外的な使用法も共通するのだが、二像はほかにも𑖀阿弥陀仏の阿にも梵字𑖀をあてる点や、結縁者が十一名も共通する点まで一致するなど、制作環境がごく近いものであったとみられていることも注意される[24]。

𑖀阿弥陀仏銘や巧匠𑖀阿弥陀仏銘の記載法の問題でいまひとつ注目しておきたいのが、アメリカ・メトロポリタン美術館地蔵菩薩像〔図36〕である。この像は、像内後頭部にしるされた𑖀阿弥陀仏ほ

図36　地蔵菩薩立像
アメリカ・
メトロポリタン美術館

図37　同　像内後頭部墨書

かの墨書〔図37〕から、無位時代の快慶作品と考えられている。[25] ただし、いま快慶真作と認められている立像の遺品は、足枘にしるされた銘記により快慶作と判断されているものがほとんどであり、足枘銘あるいは作品と同時代の確実な史料等がなく、像内にしるされた𑖤阿弥陀仏銘をもって快慶作とみなされているのは、現在のところメトロポリタン美術館像にかぎられる。[26]

メトロポリタン美術館像の両足枘は造立時のものとみてよく、削り直し等の痕跡も明瞭には認められないため、当初より足枘銘はなかった可能性がある。この像に快慶が関わったことは、像内銘のみならず作風からも疑いないが、足枘に巧匠𑖤阿弥陀仏銘がないのは、何らかの事情で制作者であることを明示しなかったためとも考えられる。

世におびただしい数が知られる三尺阿弥陀には、快慶真作に肉薄する作風やできばえをみせるものの、足枘に銘記をもたないことから快慶作と認められていない像も多い。それらのなかにはメトロポリタン美術館像と同じような性格の作品、つまり快慶が関わっていながらも何らかの事情で制作者であることをしめす巧匠𑖤阿弥陀仏銘が足枘にしるされず、いま実見できないものの像内には結縁者としての快慶の𑖤阿弥陀仏銘が書きとどめられているという事例もあるのかもしれない。[27]

こうした議論は、快慶による工房制作や分業体制の問題とも密接に関わるものであり、快慶自身の造像への関与のあり方によって銘記のあり方に変化が生じた可能性もあるように思われるが、それらの問題については稿をあらためて論じたい。

（やまぐち　りゅうすけ／奈良国立博物館学芸部主任研究員）

注

（1）快慶の在銘作品は、水野敬三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇の第一巻から四巻（二〇〇三年四月～二〇〇六年二月、中央公論美術出版）に収録される。

（2）実査は、会期中に岩田茂樹・岩井共二の両氏とともに実施した。また、銘記の解読・翻刻に際しては、野尻忠氏、浜野真由美氏（大阪大学大学院）の教示を得た。

（3）山本勉「阿弥陀如来像（松尾寺）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

（4）深沙大将像左足枘内側の𑖤阿弥陀仏銘には、末尾の「仏」字がしるされない。これについて伊東史朗氏は、枘の先端に余裕がなかったためかと推測している。
伊東史朗「執金剛神像、深沙大将像（金剛院）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

（5）根立研介「阿弥陀如来像（八葉蓮華寺）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

（6）倉田文作「奈良来迎寺の善導大師像」（『MUSEUM』一一八）一九六一年一月。

（7）平成二十五～二十六年（二〇一三～一四）度に国庫補助事業として公益財団法人美術院が実施した保存修理時の知見。銘記の一部が奈良国立博物館編『快慶　日本人を魅了した仏のかたち』（二〇一七年四月）の同像解説の挿図として収録される。なお、ここに名のみえる尊慶は、建仁元年（一二〇一）快慶作の東大寺僧形八幡神像の像内背部に小仏師としてみえる尊慶と同一人の可能性がある。

（8）紺野敏文「奈良・安養寺の阿弥陀如来立像」（『仏教芸術』一五一）一九八三年十一月。同「阿弥陀如来像（安養寺）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

（9）醍醐寺像の銘記に触れた主な論文・解説には、左記のものがある。
毛利久「快慶拾遺」（『仏教芸術』七一）一九六九年七月（同『日本仏像史研究』所収、一九八〇年十月、法蔵館／同『仏師快慶論』〔増補版〕所収、一九八七年十一月、吉川弘文館）。
三宅久雄「快慶作　不動明王像」（『国華』一〇五〇）一九八二年三月。
山本勉「不動明王坐像　快慶作」（『醍醐寺大観』一）　二〇〇二年十月　岩波書店。

副島弘道「不動明王像（醍醐寺）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

(10) 前掲注9毛利論文、山本解説。

(11) 前掲注9副島解説。

(12) 前掲注9の毛利論文では「ウ□シヤ」とし、三宅論文及び山本解説では「ワ□シヤ」とする。

(13) 略体仮名の解読にあたり、中田祝夫『改訂版古点本の国語学的研究』総論篇別冊（一九七九年十一月、勉誠社）を参照した。

(14) 松島健「石山寺多宝塔の快慶作本尊像」（『美術研究』三四一）一九八八年二月。

副島弘道「大日如来像（石山寺）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

(15) 前掲注14松島論文。

水野敬三郎「大日如来像（東京芸術大学）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

(16) 悲田院像は、平成二十一年（二〇〇九）に京都国立博物館と大津市歴史博物館が中心となり実施した調査に際して、像内頭部前面に「𑖀阿弥陀仏」の墨書が見出され快慶作と確かめられた。そのため、『日本彫刻史基礎資料集成』には未収録だが、左記の文献に基礎的なデータが報告されている。

寺島典人「京都・悲田院の宝冠阿弥陀如来坐像」（京都国立博物館編『日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察』科学研究費補助金基盤研究（A）成果報告書〔研究代表者 佐々木丞平〕二〇一〇年一月。

(17) 「周防国阿弥陀寺領田畠注文」（『鎌倉遺文』一一六三）。

(18) 前掲注15水野解説。

(19) 村治円次郎「伊賀新別所新大仏寺に就いて」（『重源上人の研究』所収）一九五五年七月　南都仏教研究会。

水野敬三郎「盧舎那仏像頭部（新大仏寺）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

(20) 副島弘道「阿弥陀如来像（光林寺）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇三所収）。

(21) このほか、先述のとおり東京芸術大学大日如来像も像内右耳部に「𑖀阿弥陀仏」ほかの墨書、像内背部に「巧匠□」の朱漆書がそれぞれあり、二種の𑖀阿弥陀仏銘を併記していた可能性がある。

(22) こうした銘記の使い分けは、法眼位の快慶が中心となり造立された京都・大報恩寺十大弟子像にもみられる。大報恩寺像は十軀一具の群像であり、ひとつの像に二種の墨書を併記する事例とはやや異なるものの、目犍連の右足枘に「巧匠／法眼快慶」、優婆離の像内額部に「法眼／快慶／兵□□／行快／法橋□」の墨書がある。なお、快慶が法橋位にあった時期の銘記も同様の使い分けがなされていたと推測されるが、現存する法橋銘の二作品（東大寺地蔵菩薩像、大阪・大圓寺阿弥陀如来像）は、ともに像内がうかがえないため確証は得られない。

(23) 「木造騎獅文殊菩薩及脇侍像」（『月刊文化財』五九七）二〇一三年六月。

(24) 前掲注9山本解説。

(25) 副島弘道「地蔵菩薩像（バークファウンデーション）」（前掲注1『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇二所収）。

(26) このほか、無位時代の快慶作品で足枘銘がないものとして栃木・真教寺と東大寺の阿弥陀如来像が挙げられるが、真教寺像は両足枘が後補である。東大寺像は両足枘の各面が削り直されており、右足枘正面に薬研彫りによる「𑖀」の刻銘があるものの当初の字とは認めがたい。ただし、もともと𑖀阿弥陀仏の墨書があり、刻銘はそれを写したものかと推定されている（水野敬三郎「阿弥陀如来立像（俊乗堂）」〔『奈良六大寺大観』十一　東大寺三〕、一九七二年二月、岩波書店）。一連の法則をふまえれば、足枘には巧匠𑖀阿弥陀仏としるされていた可能性があろう。

(27) 前掲注22でも触れたように、大報恩寺十大弟子像は十軀一具の群像であり、ひとつの像に𑖀阿弥陀仏と巧匠𑖀阿弥陀仏の二種の墨書を併記する例とはやや異なるが、優婆離は足枘銘がなく、像内額部の墨書をもって快慶作と判断されていることも、これに関連して注意される。

付記

図版掲載にあたっては、奈良国立博物館所蔵の画像データ（図1・2・4～9・11～22・28～33のうち図1・4～6・9・11～15・20・28～33は佐々木香輔氏撮影）、安倍文殊院所蔵の画像データ（撮影 佐々木香輔氏〔図34〕）、東京芸術大学所蔵の画像データ（図23～27）、公益財団法人美術院所蔵の画像データと写真原板（図3・7・10・35）を使用し、メトロポリタン美術館地

蔵菩薩像（図36・37）は水野敬三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇第二巻（二〇〇四年二月、中央公論美術出版）より転載したほか、所蔵者ならびに関係各位よりご配慮をいただいた。また、銘文画像の合成処理にあたり佐々木香輔氏を煩わせた。ここにしるして感謝の意を表したい。

・ICOM京都大会　COMCOL（コレクティング国際委員会）連絡担当者
・ICOM京都大会　運営委員

奈良国立博物館研究紀要
鹿園雜集　第二十号
平成三十年三月三十一日発行
編集発行　奈良国立博物館
〒六三〇-八二一三
奈良市登大路町五〇番地
印刷・製本　株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地